

カミサマになる選択肢

八木橋伸浩

はじめに

本紀要14号に掲載した拙稿「奄美におけるユタの成巫過程に関する覚書」では、奄美大島で2016年12月にユタとなるための成巫儀式を行なったある女性に焦点をあて、2度にわたる儀式を経てカミサマとなった事例の具体的状況と、結果として自宅に設えられた祭壇の構成を中心に紹介した。いわゆるシャーマンの成巫儀礼同様、トランス状態となり、カミが降りてきて一体化する過程を経ることでカミサマとしての能力を獲得したことはすでに報告したとおりである。

ただ、前稿においては敢えて触れなかったが、明確にしておかねばならないことが存在している。それは、カミサマとなった彼女自身に降りたカミは、テルコガナシミカタンサマ（アマテラスオオミカミ）だけではなく、最初は大和村思勝のノロサマも降り、その後改めて2回目の成巫儀式を行なったことで宇検村芦検のノロカミサマが降りたという事実である。この結果、彼女の祭壇の左側の神棚には芦検のノロカミサマが祀られ、右側にはアマテラスオオミカミが祀られることになった。これはユタとしての成巫であったと同時に、ノロとしての成巫をも意味すると考えてよい。事実、カミサマとなった本人の自覚としては、ユタでありかつノロであるという意識が明確に存在しているのである。

この点に関しては、今後、検討を施さねばならないポイントの一つであるが、本稿では、なぜ彼女はカミサマにならねばならなかったのかという点をまず整理し、成巫に至る背景と本人の精神的葛藤の状況を原則として時系列的に紹介したうえで、成巫後の本人の行動や思考を中心に取り上げ、前稿(2021)のデータを補完することとしたい。そのうえで、次稿においてはこれらの状況を鑑みつつ、現代社会におけるカミサマという存在について分析を試みてみる所存である。

さて、前稿および本稿は、一部をイニシャル化や具体的名称の省略によって関係者や関係施設等に関わる個人

的な情報の保護を行なっているが、本人に関わる情報のほとんどはプライベートな具体的事例の集積ともいえるもので、通常は許容されるものではない。しかし、むしろ実名での掲載を望む本人の意思も尊重することにした。カミサマであることを「なりわい」とする覚悟の表明の一端と筆者は受け止めている。この点を前稿同様まづ記しておく。

本稿のベースとなる情報は、本人が筆者のために記してくれた「私が神の子になって思うこと」と題した手記である。本稿では、適宜、この手記そのものを紹介しつつ、本人の記録に沿って稿を進めることとしたい。なお、前稿「奄美におけるユタの成巫過程に関する覚書」と一部重複する内容もあるが、前稿を補完し、理解を深化させるうえで欠かせないと判断したことがその理由であることを付記しておく。

和泉和香がカミサマとなった背景

インフォーマントである和泉和香は、実は筆者の教え子である。優秀な成績で玉川学園女子短期大学を卒業した後は故郷の奄美大島に戻ったが、筆者が非常勤講師として勤務していた国際基督教大学での人類学調査実習において宇検村を調査地とした際には強力な助力を得、さらに同村の豊年祭と相撲形態に関する調査成果については、筆者と連名で論考執筆にもあたってくれた(八木橋、栄 1999)。その後も奄美にお邪魔する際には常に酒食の席を囲んできたし、結婚後も旦那さんと愛犬も交えての交誼を継続してきた。

常に明るく聡明であり、筆者自慢の教え子の一人である。そんな彼女に、大きな転機が訪れようとは、筆者も予想できないことであった。

【自分をおかしいと感じる】

和香(※以下、和香とのみ記す)にとって、カミサマは決して遠い存在ではなかったようだ。「これまで私

のなかでのカミサマは、実家の近くに住む、色々なことをズバズバ当てる、Mカミサマが一番身近なカミサマかもしれない。毎年、その1年を観てもらおう……だとか、迷ったり悩んだりするときに観てもらおう」(※前述した本人の手記より引用。以下「 」内の文章は同様)ような存在であった。このため、カミサマについての詳細は知らなくても、「どうしようもなくなったら、カミサマへ」と考えていたのである。

そのような和香が自身を「おかしく」なり始めたとき意識したのは35歳ころであった。あることがきっかけで精神的に不安定になりだす。26歳で嫁いだ村に、急に適応できなくなったのである。心療内科で下された診断は「適応障害」であった。村に住んでいながら、村の行事に参加できなくなり、抗うつ剤を飲み始め、鹿児島市内へ1年間毎月、カウンセリングにも通った。

少し症状も落ち着き始めたころ、「今度は金縛りに始まり、見えない力に口を奪われ何語とも分からない何かを喋り始め、自傷行為、旦那や愛犬への突然の八つ当たり……。毎日ではないものの、自分で自分をコントロールすることに限界を感じ」るようになる。母親と一緒に、30代最後の11月ごろ、前述のMカミサマを訪ねたのであった。

祭壇に通され、Mカミサマが祝詞をあげ始めた瞬間、また見えない力に口を奪われ、涙を流しながら何かを発していたという。奪われた口が自身に戻ってきて我に戻ったところ合いをみて、Mカミサマから「あんた、カミサマなりまいよ」と告げられたときは、和香はその言葉を受け止められなかった。「カミサマになる……何で？意味うつら～ん(分からない)」という気持ちであった。

翌月、再度Mカミサマのもとへ何うと「私はオヤ(親)になれないから……」といわれ、Mカミサマは祭壇へ向かい「99歳、100歳まで……」と何かを唱えていた。それが「親神・子神」の関係性、そして神様への「延期願い」(※詳細は拙稿2021参照)だったことに後日になって気付いたのである。

どうしたらよいか分からないまま、精神的にも不安定な日々を過ごしながら新しい年を迎えた、そんなときに、NHKの「新日本風土記」の奄美大島編が放送され、そのなかで「シマの生き神様」と紹介されていた、優しそうなカミサマにテレビを通して出逢ったのであった。彼女にとってそれはまさに「病院ならぬ、カミサマのセカンドオピニオンだ！」と受け止められた。

そのカミサマのところに行ったことがあるという後輩から連絡先を教えてもらい、早速伺う。大和村から約2

時間。向かった先は笠利町佐仁である。

【カミサマとの新たな出逢い】

テレビどおりの優しい、おばちゃん・栄サダエ氏が迎えてくれ、和香は一安心であった。ところが祭壇に座り、祝詞が始まった瞬間、「また、あれが、始まった」のである。

「あんたのそれは、何ね！」優しいおばちゃんが、厳しい声色に変わり、奪われた口が戻ったころ、Mカミサマと同じことをいわれた。だが、話を進めるうちに、恐いおばちゃんから優しいおばちゃんに戻っていった。「しかし、話す内容は決して優しくなく、現実的に厳しいものだった」という(※以下、彼女の成巫前の段階でのカミサマ・栄サダエ氏は彼女の手記にしたがって「おばちゃん」と記す)。

その後は旦那さんと2人で、その次には旦那さんに加えて和香の両親も一緒に佐仁へ足を運んだ。そして、おばちゃんは彼女に「人生の二択」を告げたのである。「神の子になるか、それとも、生涯、精神の病と付き合うか」であった。そして「もし、神の子になるのであれば、私が責任を持ってあなたを、『ちゃんとした神の子』にするから」と告げられる。和香は「多少の制限はあるにせよ、これからも元気で健康に過ごせ、これまで同様、楽しい日々を過ごせられるのであれば、神の子になる」と思ったという。そして、両親も旦那さんも同じ思いでいてくれたそうだ。

それから何度か通う間に、何故、自分が神の子にならないといけないのかを、おばちゃんは示唆した。それは、実は、彼女の母親が本当であれば継がなければならなかったノロカミサマを、母親が継がなかったために、娘である和香にシラセが来たという内容であった。見えない力に翻弄されていたのも、それを彼女自身に早く分かって欲しいという現れだったという。和香は「ビックリだった。母の実家って、そんな家系だった？」と思うしかなかったのである。

そして母親は、これまで和香に何度も、恐ろしいほど鋭い目で睨まれたことがあったという。そのノロカミサマが彼女を通して、そうさせていたのだという。母親は「本当に怖かった」と述べている。しかも、かくいう母親も、高校を卒業するころまでは、何かと近所のカミサマに世話になっていたということが分かり、和香は再び驚くしかなかった。

このようにして、彼女の周りの過去が、おばちゃんを通して、よい意味で、どんどん暴かれていったのである。

そして、和香が神の子になるプロセスも始まっていった。

【母親のルーツ】

母親のルーツは、宇検村芦検集落。祖父は和香が産まれる以前にすでに亡くなっていた。祖母が亡くなるまで毎年、和香は夏休みになると約10日間、芦検で過ごした。集落の一大行事である豊年祭、お盆、魚釣りに川遊びなど、思い出深い記憶が残る。

特に豊年祭は、トネヤから土俵までの勇壮なフリダシが大好きで、いとこに混じって、小学校に上がる前までサラシを巻いて、「ヨイヤーヨイヤーヨイヤ！ワイドワイドワイド！」の掛け声をあげながらフリダシに参加した。土俵に入る直前になると母親に「あんたは女の子だから」と列から出され、土俵に上がれず何度もベソをかいたという。稲すり踊りを観て、会場で振る舞われるカシキおにぎりの美味しさは忘れられない。その踊りや味は、今も変わらず受け継がれている。

お盆は、迎え・送りに親族揃って行くのが楽しみで仕方なかった。忘れ物がないか、みんなで供え物などを確認し、オジオバ・いとこと列をなし、椎の木が生い茂り鬱蒼としているものの、山を切り拓いた斜面にある遊び場感覚にもつじ墓地向お墓参りをした。ぐるぐる墓を回って線香を立て、「のんのんさん」をした。

高校2年生の夏休みの課題が「自分のルーツを調べる」だった。躊躇なく選んだのは母方のルーツである。ちょうどそのころ、I家の祖先を調べていたオジがおり、レクチャーしてもらいつつ、芦検の墓石に刻まれた名前を確認し、全国に広がっていったI家の親戚の人々に系図を提供してもらい、和香は巻物のような家系図を作ることができた。冠婚葬祭に関わらず、I家の集まりにとって、その巻物家系図は必須アイテムとなり、それをみながらオジやオバから昔の話をたくさん聞かせてもらった。この「夏休みの課題」を与えてくれた恩師には今も感謝しているという。

【思勝Y家のノロカミサマ】

和香の成巫式において、そうした母親のルーツである芦検のI家のノロカミサマを迎えることが決まっただけで、次々と事件が起こり始めた。

2016年初夏。旦那さんの実家の古い家を取り壊し、義父母のためにバリアフリー設計の家を新築することになった。物置として使われていた古い家は解体されることになり、旦那さんは、義兄や義父などとともに、家のなかの道具を次々と別の倉庫に移す作業をしていた。そ

のとき、剣道道具の傍に、埃をかぶった「何か」を旦那さんは見つけた。埃を払うと、それは細かい彫りが施された、丸櫃であった。旦那さんは当時、文化財に関わる仕事も担当していたため、この丸櫃のことが大いに気になったようであったが、丸櫃のことは和香に知らされることなく、丸櫃は段ボールの箱に入れられて村の中央公民館に運ばれた。

数日後、仕事中の和香に写真付きのメールが届いた。「何これ？」「古い家から見つかった」「それってカミサマの道具なんじゃないの？」「多分……」「おばちゃんに連絡したほうがいいんじゃない？」「ワン（俺）から連絡してみる」というやりとりがあった。

旦那さんは、おばちゃんに「なんで中央公民館にお供するの！」と電話越しに怒られ、「今すぐ実家にお供して仏壇の脇に置いておきなさい！」といわれ、箱に入れられた丸櫃は旦那さんの実家に戻ってきたのであった。

「あげ、こんな、やっけなむん持ちて（あ～、こんな厄介なもの持ってきて）」と義父。どうやら丸櫃の存在をそもそもY家の人々は分らなかったようである。旦那さんも、小さいころに屋根裏で見たきりだった。

後日、和香の自宅にカミサマの祭壇を設えるにあたって、おばちゃんのご主人と佐仁から大和村までやってきた。自宅で、一通りの設えの打ち合わせを終え、「じゃあ、Yの実家にもご挨拶に行きましょう。お櫃も拝ませただけかな」と皆でYの実家へ向かった。だがこのとき、彼女はYの実家へ行かねばならないことは分かっていたとしても、行きたくなかったのであった。

旦那さんの実家は、集落唯一の商店を営んでいる。義父は元大工、義母はキャリア50年以上のY商店店主である。彼女が嫁いできた当初は、それぞれが優しく接してくれ、集落に伝わる八月踊りの唄も教えてくれた。店は集落の憩いの場である。当時は、超ポジティブ思考で明るい義母の下に、集落内外のおばちゃんたちが買い物ついでに訪れ、情報交換とユライ（お喋り）の楽しい空間があった。義母の仕入れに対する眼は厳しく、卸業者もそれを知っていて、集落の小さな商店ながら充実した品揃えだったという。義父は職人気質の人であるが、焼酎が入ると笑顔をみせ、昔の話をしてくれた。そして実家には義兄と、病気がちだった義姉も一緒に暮らしていた。

だが、次第に旦那さんの実家に行くことが和香には苦痛になってきたのである。実家にいても何となく気持ちが落ち着かず、「早く家に帰りたい……」と感じてしまうのであった。それ以降、近所でありながら、お盆と正

月程度しか行くこともなくなり、最近ではまったく行くことがなくなってしまった状態であった。

そんな実家に行くのであるから、分かってはいても「何となく嫌」だと和香は思った。重い気持ちを引きずりながらも実家へ歩を進め、そして実家の敷地が近づいてきた途端、「やっぱ、無理」「無理～！」と泣きわめく和香の腕を抱えて、おばちゃんが実家に引きずり入れる。彼女は「半端ないほど、落ち着かない」と思った。「実家の義父・義兄に睨まれているようで怖くて仕方ない」状態だったのである。

認知症の症状が生じていた義母は久々の来客に笑顔で座っており、和香はおばちゃん夫婦に挟まれて座った。「何でそこまで？」と困惑の面持ちの旦那さんの視線があり、何ともいえない気まずい雰囲気包まれている。

おばちゃんは、箱に入ったお櫃とその中身を用意してあった海水で拭くよう和香に指示し、Y家の仏壇に7本の線香を立て拝み始めた。「はいはい、はいはい」とY家の先祖の声を聴くおばちゃんの声と、お櫃のなかに入っていた勾玉などを彼女が拭く音だけがしばらく家のなかに響いた。

「Y家のなかで、名前に漢数字の入るのはどなたですか？」と、ご先祖様との会話を終えたおばちゃんが切り出した。しばらく静寂な間があり、「あ……自分ですかね？」と旦那さんが答えた。旦那さんは漢数字の「一」が入った名前である。

「はい分かりました。そしたらあなたの家にお供しましょう」「皆さん、このお櫃となかのお道具は、ノロカミサマのものです。このような大変に貴重なお道具がきれいな状態で見つかるとは……。ただY家のどなたかが、拝まなければならなかったのですよ。娘さんは神高いですね。体調がすぐれないのは、これが原因でしょうね。



写真1 丸櫃

ただこれからは、お櫃は次男さんの自宅へお供しますから……」とおばちゃんはいった。結果、丸櫃は和香と旦那さんが暮らす家へとやってきたのである（写真1参照）。

【葛藤】

Yの実家の新築工事は順調に進み、棟上げのお祝いとなった。行かなければという気持ちと行きたくない気持ちの板挟み状態になった和香は、旦那さんに断りを入れ、自宅の床の間にある、Y家の丸櫃に拜んだ。皆が笑顔で、「ほーらしゃ（誇らしい）」と楽しそうに宴をしている光景が頭に浮かんだという。「それが浮かんだだけでよかったのか」と思いつつ夜を過ごした和香であった。結局、宴の席の料理は旦那さんの母方のいとこの嫁たちが準備してくれていた。「和香ちゃんは？」「あ、まだ精神的にちょっと……」「そうなんだ」、彼女はそんな会話を想像するばかりであったという。

さらに、和香は自身の実家との関係もギクシャクすることとなった。ことの発端は、おばちゃんご主人が奄美市内にある彼女の実家を訪ねてきたことであった。実家の仏壇の位牌の位置がよろしくなかったらしく、おばちゃんはその説明をしてくれ、そして大和村まで行ってきたこと、丸櫃が発見されたことなどを話して帰られた。

その後、和香が実家へ行っても、常に位牌の位置は変化しておらず、説明してもらったのに何でなのだろうと思いつつも、ことを荒立てたくなかったことから、しばらく様子を見ていたという。結局、しびれを切らせた和香が母に話し、渋々設え直してもらったのであった。この一件の後、自身の実家でありながら少しずつ距離は遠くなり、遂には、半年近く足を運ばなくなり、連絡も最低限……という事態になってしまったのであった。

【カミゴトを支える店】

そうこうしつつも、神様を迎える儀式（成巫式）の日柄も決まり、必要な道具類を次々に揃え始めなければならなくなる。カミゴト（神事）で使う器類、マガタマ（勾玉。首から掛ける数珠）、香炉、リン（鈴）、注連縄、大小の祭壇、タカボン（高盆）、神衣装、等々である。

カミゴトを始めるにあたり、和香が初めて知ったのが「そうした道具類一式」を、島でひっそりと扱う店の存在であった。おばちゃんに紹介されたのは、奄美市内にある小さな金物屋さんである（現在は都市区画整理のため閉店）。半信半疑で店に入り、カミサマの道具類を探している旨を告げると、和香は店の奥にひっそりとたた

ずむ神具コーナーに案内された。そこには、おばちゃんから指示されたものがすべて揃っていたのであった。

店主から閉店の話を聞いたため、予備の分も考えつつ何度か足を運び、購入していった。大きな祭壇の設えは、家にあって使っていないテーブルを利用することにした。こうして、祭壇は次第に形を整えていったのである。

次に用意したのは、タカボン（高盆）と台所の神様用の祭壇である。母の友人のご主人が建具屋さんをしていたことから、この人をお願いして作ってもらった。まさにトントン拍子に進んでいったようだ。その後には用意したのは、神棚と神衣装である。便利な現代社会を象徴するように、ネットで注文ができた。神棚は伊勢から、神衣装は京都から、それぞれ注文して取り寄せた。神衣装は「神社 神職 衣装」と検索をかけると、すぐにヒットしたという。神衣装は神社の神職の「制服」であり、そうした店があっても当然であった。ただ、大変だったのは袴だったという。巫女用の赤い袴であれば行灯型のものが普通に販売されているが、彼女が必要なのは白の袴である。店にある白い袴は馬乗りタイプしかなかったため、行灯型にするためには仕立て直しが必要で、そのための日数も必要であった。着物の仕立てを生業にしている母に相談したが、袴の仕立ては経験がないと断られてしまった。そこで、まだ時間的な余裕もあったことから、和香は泣く泣く、業者に仕立て直しをお願いしたのであった。

以上でカミゴトに必要な品はほぼ揃い、残すのは注連縄になった。準備していたのは9月であり、まさに時季外れである。おばちゃんはエキ（易）を取っている本土のお客さんから贈られてくるらしいが、余裕はなく、和香自身で探すことを余儀なくされた。もしかしたら、前述のカミゴト関係の道具類一式を扱う金物屋さんであれば知っているのでは、という祈るような思いで金物屋さんを訪ねと、以前この店の近くでたい焼き屋をしていた方が注連縄を作っているとのことで、その場で紹介の電話をかけてくれた。移転した、たい焼き屋は、今では焼き芋屋になっていたが、店の裏に作業場があり、夫婦で注連縄を作っていた。正月用の注連縄とは別に、彼女のようなケースに備えてカミサマ用の注連縄も作っており、常に予備のものを用意しているとのこと。和香はそこで、カミサマ用の注連縄に加え、成巫式に欠かせないミキを作る際に必要な左綱も纏ってもらうことができたのであった。

【成巫儀式前の多忙さ】

例年9月になると、島は何かと忙しい。小学校・中学校の運動会、豊年祭、八月踊り、等々。それが毎週末にやって来る。しかも、スポーツ推進委員をしている彼女は、8月下旬から村内の各集落を回り、集団演技の伝達指導をしており、9月末まで平日の夜は、ほぼ何処かの集落に出向くことになる。このため、自身の集落の八月踊りの練習を途中で抜けて行くこともしばしばである。毎年、怒涛の行事ラッシュを乗り越え、ホッと空を見上げるころには、季節は夏から秋に動いている。

【1回目の成巫儀式】

その怒涛の行事ラッシュを終えた2016年10月21日吉日。いまだ実家との間のギクシャクした状態が続いていたため、両親は不参加であったが、多くの方々の協力と参加のもと、無事に「1回目の成巫儀式」は終了した。

「1回目の成巫儀式」でお迎えしたのは、アマテラスオオミカミ（天照大御神）と嫁ぎ先のノロガミサマのお櫃を預かっていた方であった。1日に2度、神様を迎える儀式となった。特に儀式の後半は、カミの口が開いてから（神様が降りられてから）の六調が非常に長く（自分自身ではコントロール不可）、三味線と唄、チヂンをお願いした方々は「こんなに長い六調は初めて」とのことであった。その2日後、「ミキヤムドゥリ（三日戻り）」のため、佐仁へ何う。お迎えした神様に間違いがないかを確認する儀式である。そこも無事に済み、晴れて彼女とおばちゃんは、「神の親子関係」となったのである（※詳細は拙稿2021参照）。

結果、彼女の今までの生活リズムに「カミゴト」が入ることになった。

後日、旦那さんと一緒におばちゃん（※ここから、以下、オヤサマと称す）宅へ伺い、改めてのお礼を申し上げますと、彼女自身が本来お迎えしないといけない「芦検のIのノロカミサマ」の話になった。1回目の儀式のとき、実は、「芦検のIのノロカミサマ」も降りたがっていたとオヤサマはいう。日をさほど置くことなく、年をまたがないうちにお迎えしないとマズイということになった。

【2回目の成巫儀式】

こうして、「2回目の成巫儀式」の日柄を12月25日に決め、粛々と準備が進められることになった。

1回目の儀式の際に「芦検のIのノロカミサマ」が降りることを一旦諦めたのは、別のノロカミサマのお道具があったことに加え、「ナナノアヤハブラ」というかん

ざしが用意されていなかったこともあったという。

このころには彼女は両親との関係も修復され、名瀬の実家にも足を運ぶことができるようになっていた。「ナナノアヤハブラ」のかんざしを作るにあたっては、裁縫が得意な彼女の母親が協力を惜しまなかった。

ナナノアヤハブラのかんざしは、四角の布を対角線上に折って二辺を縫い、三角形にしたもの（生地や柄には制限はない）を63枚作らなければならない。これは、1本のかんざしに7枚1組のものが3組付き、それが3本分必要であった。さらに白い鳥の羽が必要であったが、これは、母親の友人の近所の家で飼っていたニワトリの羽を偶然にも頂戴することができた（写真2参照）。「2回目の成巫儀式」でもミキが必要で、儀式の2日前にミキ作りを行なった。季節柄、白いサツマイモが手に入らず苦心したが、集落の先輩宅の冷蔵庫に奇跡的に入っていた。これらの偶然は、まさに「神ぬ引き合わし」そのものであった。

「2回目の成巫儀式」には彼女の両親も参加して宇検村芦検集落へ出向き、芦検に住むたくさんのオバたちに見守られ、無事に「Iのノロカミサマ」をお迎えすることができた。ここから、改めて彼女の「神の子」としての生活が始まった（※詳細は拙稿2021参照）。



写真2 ナナノアヤハブラ

カミサマになって

【神の子として経験するカミゴナシ】

神の子といっても、すべてが最初は手探り状態であった。「これでいいのかなあ」と不安な気持ちのままカミゴトをやってしまうと、カミゴナシ（神様への無礼に対する罰）が容赦なくやってくる。「カミゴナシは高い神であればあるほどキツイものはない」というのがオヤサマの口癖である。オヤサマから「あんたも割と高い神様だから、慎重に」とはいわれても、目に見えぬカミゴトで、どれが無礼にあたるのか、彼女には見当も付かず、1年目はとにかくカミゴナシの連続だった。彼女のカミゴナシの特徴は、分かりやすく表現するならば、「三半規管をカミサマに牛耳られてしまうこと」だという。起きられず、食事もできない。体がグラグラする。このため仕事にも行けない。無礼の理由が分からず、オヤサマに連絡して指示をいただき、「これだったのか……」と理由が解明することの連続であった。彼女は学習能力の不足を日々実感したという。

【カミゴトと自然とのつながり】

そのようななか、「カミゴトと自然とのつながり」というものが少しずつ、カミゴトの実践を通して分かってきたのも事実であるという。その一つに週一度のアミイゴへの参詣がある。アミイゴとは集落のなかでも神聖な水場とされている。

彼女が現在使わせていただいているアミイゴは、かつて（昔々）ノロサマが実際に使っていたアミイゴだとオヤサマから指示された場所である。オヤサマから「ここがあなたのアミイゴで、女の神様がいます」といわれた場所で、今は誰も住んでいない屋敷のなかの奥に位置している。家主の許可を得て、その場所を旦那さんと掘り始めた。オヤサマからは「そこには馬がいるから」ともいわれていたが、掘っている途中で本当に「馬」（逆さ馬が描かれた盃）が出てきたため2人とも驚いた。約2日間かけて交代で掘り進めていくと、土のなかから水が湧き出てきたのであった。1日おきに見に行くと、少しずつ開けた穴に水が溜まっていく。そうして、そこが彼女のアミイゴとなった。

アミイゴでいただく水は、毎朝替える2つの祭壇への水、榊の水に使われる。このため毎週末、アミイゴへ行くのが彼女のルーティンとなっている。2リットルのペットボトル2本、じょうご、ヌイブ（柄杓）を持ってアミイゴへ行き、アミイゴの神様へ挨拶し、水を頂戴す

る。寒い冬の水は心なしか暖かく、暑い夏の水は水滴が付くほどに冷たいという。

水を頂戴できない日もある。それは、彼女のアミゴへの管理不足のためだという。彼女の住む大和村思勝集落は、湧水の多い集落といわれているが、自然相手なので、湧水の出口が泥や枯葉でふさがれてしまうと水が出てこない。そして、そこには、たくさんの生き物も生息し始めた。「お水をいただく」、ただそれだけのことであるが、自然への畏敬の念を持たないとカミゴトはできないということを彼女はアミゴから教えていただいているという。

十千十二支のなかの「みずのと・とり」(癸酉)の日は、アミゴの神様の祝日である。60日に一度訪れるこの日だけは、神衣装をまとい勾玉を下げ、シュウギ(上餅粉を水で溶いた団子)、線香、3本のススキを持ってアミゴへ伺う。

このような水の神様に対する風習は、現在でも年配の方々には継承されているという話を彼女は聞いている。台所の神様(火と水の神様)は「食」に直結するものであり、台所の神様を拝んでいる家庭では継承されているのかもしれないと彼女は考えている。

自然からいただいたものは、自然に「お返し」しないといけないのもカミゴトのルールである。枯れた榊・アサヒバナ・線香などは浜辺で焼き、その灰を海へ還す。香炉の砂も海砂なので、定期的に海へ行き、使った砂を還し、きれいな海砂をいただくのである。ただ、浜辺で焼いたものを海へ流す行為自体が、現代では法的に制限されつつあるため、現実の世界のルールとカミゴトの世界のルールの狭間で苦悩する部分も少なくない。

榊の確保にも悩ましいところがある。山で仕事をしている人々やオヤサマは、自分で確保することが可能とのことであるが、仮に自前の山を所有していたとしても、榊が自生しているかどうか分からない彼女は、わざわざ名瀬の花屋に行かざるを得ない。年間を通して榊は販売されているが、季節や枝の状態によって、長持ちもすることもあれば、すぐ枯れてしまうこともある。買いたいときに必ず販売されているわけでもない。枯れゆく榊を見ながら「このご無礼を……」と祭壇に謝ることもしばしばあるという。

また、本格的にエキ(易)を取っていない彼女は、まだ少ない方だともいえるものの、線香・ロウソク・焼酎が、カミゴトを始めてからは欠かせない消耗品の一部に加わった。特に線香とロウソクを切らせることはできないため、奄美市内の量販店やネットでの「大人買い」状

態にあるという。

【お櫃と墓にまつわる問題】

そうしたカミゴト生活が始まってしばらくしたころ、彼女はオヤサマから「解決しなければいけないこと」があると告げられた。嫁ぎ先であるY家の問題であった。この問題が解決しないと、彼女が「本来拝むべき神々」のパワー(力)が発揮できないというのである。

一つは彼女が自宅に預かっているノロサマのお櫃のことで、もう一つはY家の墓にまつわる問題であった。

お櫃は元々Y家のものではなく、おそらく戸円集落からお供されてきたものであると考えられること。そして、Y家の墓を新しくした際、以前の墓に取り残された遺骨が残っていること。この2つが問題であり、これを解決しないと、彼女が現在拝んでいる神様たち(特にI家のノロサマ)に「ご無礼」をしている状態が続いてしまい、しっかりとしたカミゴトができないということであった。オヤサマは、Y家として幸運であったのは、こうした「ノロカミサマ」「ご先祖」のことを解決できる「神の子」としての彼女の存在があることだということ。Y家のためにも、同時に自分自身のためにも一日も早く解決するようオヤサマから指示されたのであった。

ところが彼女は、無意識のうちに「神の子」としてやってはならないことをしてしまったのである。ある夜のことであった。祭壇の前に座り、いつものように晩のご挨拶を終えたあと、「誰か」が彼女を「止めていらっしゃる」のが分かったという。カミサマからの「お示し」かと、しばらく手を合わせて座っていたところ、地の底からエメラルドグリーンの玉が上がってきて、彼女の頭上で、パーン!と弾けた。何だろうと思っていると、「はあ〜ようやく、いじた〜(出てきた)」「あげ、くまや、だーありょんかい?(ここは何処かしら?)」と口を奪われてしまった。彼女が察するに、それは少しふくよかで落ち着き払った琉装な感じの女性であった。「波の音がしない」「夜なのに何故ここはこんなに明るいのか?」ブツブツと話す。最悪なことに、その日に限って旦那さんの帰宅が遅く、旦那を待つこと約3時間近く、祭壇で口を奪われたままの状態であった。ようやく帰宅した旦那さんを祭壇のある部屋に呼び、「ここは何処だ?」「お前は誰だ」「波の音がしないが何でだ」「私の名はナカジョ」……。そのような会話をしてから、その「ナカジョさん」は彼女の口を解放したのであった。後日、オヤサマに話すと、それは彼女の家で預かっているお櫃の主だということ。彼女が、お櫃を「価値のある神道具だ」と考え、本来拝

むべき芦検のノロカミサマ以上に気にしてしまったが故に、彼女の下へ降りてきてしまったのだとオヤサマ。1人の「神の子」に2人のノロカミサマがいてはいけないのである。芦検のノロカミサマに対して大変に無礼なことであり、早く、このお櫃のルーツを探して、本来戻るべき場所へお供するようオヤサマからいわれたのであった。

半年かけて、戸籍や年配の方などからの話をたよりに、ようやくY家にお櫃がお供されてきた経緯が判明した。またその間、このお櫃が15世紀ころに琉球で作られたものであることも分かったのであった。

しかしながら、お供できる状況になるまでに、かなりの時間が経過してしまった。何といたってもノロカミサマの道具であり、Y家からいきなり、「はい、お返しいたします」というわけにはいかないのだという。2018年6月、何とかその集落の区長宅(そこもノロカミサマヒキ)へお供し、預かっていただけることになった。彼女は同席しなかったが、そのときにUターンで当該集落に戻って来ていた年配の女性が事情を知っているはずだということに声をかけ、同席してもらい、お櫃を拜んだようであるが、その人は実はノロカミサマを継承しないといけなかった方であつたらしく、「うとうるしゃ(恐い)」といって中座したそうである。島の年配の人々(70代以上)は、ノロカミサマを身近に見てきた世代であるため、畏れ多く感じるのは当然なのかもしれないと和香は感じている。

一方、Y家の墓問題は、和香の体調にまで影響を及ぼした。2018年6月下旬、彼女は仕事がオーバーワーク状態となり、出勤できない体調となってしまった。心療内科での診断は再び「適応障害」で、休職せざるを得なくなった。食べ物の味はせず、凄まじい眠気に襲われ続けた。日中はテレビをボーっと観て過ごし、唯一の外出は夕方の愛犬との散歩という日々が続いた。幸いなことに薬の増量はなかったが、「とにかく今は休むこと」を医師から指示された。彼女は1か月程度で復職できると楽観的に考えていたが、1か月経っても、復職したい気持ちはあるものの「あと一歩」が踏み出せない状態であった。

オヤサマに相談すると、「それは仕事だけの問題ではない。Y家のお墓を解決して欲しいというウヤフジ(ご先祖)からのシラセではないか？」との回答。お盆も近づいている時期であった。彼女は旦那さんとオヤサマ宅へ伺い、新暦の8月15日大安の日に、その日柄を決めた。奄美のお盆はほとんどが旧暦であるため、この日はちよ

うどお盆前になる。しかも、ウヤフジを迎える目印として作る七夕(旧7月7日)直前にあたる。そこで、この日しかないということになったのであった。

当日の段取りは以下のように決めてあった。遺骨は現状では取り上げることもできなくなっているため、以前あった墓に海砂を、さらに周りには生米を撒き、旦那さんが「お供しょーろー(お供いたします)」とあって現在の墓へご先祖の魂をお供する。和香は現在の墓でお供え物を持参して待ち、魂が合祀されたところで改めて拝み、旦那さんは実家の仏壇に線香を立て報告する。彼女は「これで無事に儀式が執り行なわれました」と、吸い物を作って祭壇に報告する。以上が事前に決めていた段取りであった。

だが当日、この段取りは大幅な変更を余儀なくされる。7月下旬からは集落墓地の擁壁工事が始まっていた。8月15日、吸い物の準備もあらかた終え、いざ墓地へ出向いた。オヤサマから指示された段取りにしたがい、旦那さんが以前の墓に行き、和香は現在の墓で待機していた。ところがいつまで経っても旦那さんは戻って来ない。工事業者と旦那さんの話声が聞こえ、「オヤサマと連絡がつかない」といいながら旦那さんは和香のもとへとやってきた。オヤサマと連絡が取れた途端、「擁壁工事の場所が以前の墓の場所で、基礎を掘っていたら人骨が出てきたのですが……」とオヤサマに話す旦那さん。ひとしきり旦那さんとオヤサマとの間で段取りに関する話が交わされたあと、和香は旦那さんから電話を渡された。

「あんたは、すぐ家に帰りなさい。自分を塩で祓った後、屋敷のすべてを塩で祓い、着ていた服と神衣装をすぐに脱いで他と別に洗濯しなさい。まずは早く、そこから出なさい！」とオヤサマ。詳しい状況が分からないまま、和香はひとまずオヤサマの指示どおりに祓いを行なった。その後、昼食時を待ち、彼女はオヤサマへ改めて連絡をした。

オヤサマからは、「ちょっと状況が変わったけど、この変化はいいことよ。本来であれば魂だけのお供の予定だったけど、たまたま工事をしている、ご先祖様の遺骨がお供できたんだから。お墓へのお供え物は納骨の後にご主人に持たせなさい。今回ご主人は納骨するという手順を踏むから、7日間は自宅には戻れないからね。あんたもミカタサマに7日間のお暇をいただいて」と伝えられた。

旦那さんは、義父と遺骨が出てきた場所へ行き、取ることができる分のご先祖の遺骨を出して塩水で洗い、奄美市内の葬儀所へ骨壺を買いに行き、無事に納骨するこ

とができた。その間、和香は旦那さんが実家で過ごすための衣類などの準備をしていた。いくら実家と我が家が近くても、7日間分となるとちょっとした小旅行程度の荷物になった。彼女も、祭壇での朝夕のご挨拶に7日間のお暇を頂戴したのである。

7日後、無事にお盆を迎えた。このときのお盆でも、和香はY家の実家に足を運ぶことはできなかったが、きっとY家のウヤフジの皆様は「ようやく一緒になれた」ことを、さぞかしお喜びになっていることだろう、と彼女は思う。

こうして、平成最後の夏、和香のカミゴトに関わる懸念事項はすべて片付いたのであった。

【新たなカミサマの誕生】

こうした経験を重ねるなか、彼女は「芦検のノロカミサマ」をお迎えしたあとで、新たなカミサマの誕生にも立ち会う機会を何度も得ている。新しいカミサマ誕生の状況は様々である。

あるケースでは、本来お迎えすべきでないカミサマを迎えてしまっていて（シクジリガミと呼ぶ）、それを正す儀式をする。また、本人は生まれ育ちが内地、もしくは奄美出身者で、ルーツを辿るとカミサマをお迎えしないといけないシラセがありお迎えするケース。奄美には何のルーツもないが、カミサマをお迎えしないといけないシラセがありお迎えする、等々、その状況は異なっている。

そして、それらの人々の境遇もまた様々で、本人や家族が怪我や病氣、災難に相次いで見舞われたり、精神疾患を患っていたりと、それぞれの事情を抱えている。和香は、自分自身と照らし合わせ、「私は、まだマシかなあ」との実感を漏らす。そして、カミゴトを「受け入れる」ことで、各人の境遇は大きく変化する。儀式の前後での表情の違い、後日会ったときの状況の変化に、和香はいつも驚かされているという。

和香自身はこうした新たなカミサマ誕生の場に介在することで、「カミゴトそのもの」「ウヤフジに対する恐れ多さ・大切さ」を客観的視点で観ることができるうえに、儀式に必要なモノやコトを様々な状況で、実践を通して学び取る場となっているようである。毎回、声をかけてくれるオヤサマに対して本当に感謝していると和香は語っている。

【カミゴトライフの成立以後】

和香は成巫後、カミゴトにあたる自身の生き方を「カ

ミゴトライフ」と称している。「神の子」としてカミゴトを始めて約3年がたった際、彼女はカミゴトライフに身を置いて色々変わったこと、思うことについて、次のように記している。

「私が神の子になった……ということは、いつの間にか村のなかでどんどん噂になっていた。しかし、今でも世襲制でノロカミサマを拜まれている方がいる集落もある。その方々が本来のノロカミサマであり、私のはどうなの？と一部から疑いの目で見られている。カミゴトをしていることが分かった途端に、自分のことを私に見抜かれてしまうのではないかと、離れていく人もいた。こちらを見れば、『死人を蘇らせることができるんじゃない？』と冗談交じりで話してくる人もいる。『あ、そうなんだ』と受け止め、これまでと何ら変わりなく接して下さる方もたくさんいる」と。そして、「カミゴトに対する世間一般的な価値観は、本当に様々なんだと、身を以て感じる。少々短気な部分がある私自身も、以前のように一つ一つに目くじら立てることはなくなった。逆に、今までより、いい意味で冷静に現実の世界を俯瞰することが少しずつできるようになってきている」という。

ただ、大変なのは身内からの理解のようである。旦那さんの親戚には「私がカミゴトをしていることを理解してもらおうのが大変だった」と和香は記している。和香の実家や親戚はすんなりと受け入れたようであるが、旦那さん側の親戚からは未だ受け入れられていないのが現実のようである。和香は「親族でも価値観の違いでこのような事態になってしまう」と感じている。

和香は今、家族以外のお悔みには参列できない。カミサマになって、いわゆる「最期のお別れ」ができなくなったのである。このため、「生きているうちにたくさんの人と交流しておかなければ……」と彼女は思う。と同時に、「神の常識」と「この世の常識」で妥協点を作らないといけなくなった自分があることを和香は強く意識するようになった。「日常生活のなかで、カミサマが納得いかない部分が出てきても、この世ではある程度の妥協も必要である。そこの見極めや自分自身の気持ちのコントロールも大変だ」と考えている。

と同時に、「今でもカミサマはシマ（集落）を守って下さる存在なんだということ」を、身を以て感じているという。ライフスタイルの変化で、集落行事も「変化しないといけない部分」と「変化してはいけない部分」に分けられるようになってしまったが、できる限り集落行事をこれまでのスタイルで少しでも継承していけるのであれば、「シマのカミサマもきっと『ちゃんと守ってあ



写真3 和泉和香氏

げたい』というお気持ちになるのかなと、自分がノロカミサマの立場に立ったときに感じた」という。「カミサマから私に降りて来た言葉『山の青、海の青、空の青。3つの青を守って欲しい』。大げさな言い方はしたくないが、集落としてのシマだけでなく、日々の祈りを通して、アイランドとしての奄美を陰ながら守っていかれたらいいかな、と思っている」とも記している。

和香は、「神産まれ、神育ち」という言葉もいただいたという。「ああ結局、私は産まれながらにして、こういう運命にあったのだと、つくづく感じた。これから先、どのようなカミゴトライフを過ごしていくのかは分からない。もちろん、一人の、この世の人間としても充実した人生を送れるようにすることも忘れてはいない。しかし、親様に助けていただいた恩を忘れず、学べることはたくさん親様から学んで、自分のカミサマからもたくさん教えを乞うて、一人前の神の子として歩んでいけるよう、精進していきたい」と考える（写真3参照）。

和香の手記の最後は、「結局、カミゴトって生涯修行、つまり生涯学習なんだな。そして、いつか私も『生きる文化財』になれる日が来たらいいな、なんて思っている」の文章で閉じられている。

おわりに

自身の体調や精神状態の変化を契機に、最終的に和香

はカミサマになる道を選択したわけであるが、その道は平坦なものではなかったようだ。【葛藤】の項に記したように、成巫過程において、和香は嫁ぎ先のY家に対しても、さらには自身の実家であるI家に対しても、距離を置く状態となっている。これは、精神的な問題も当然存在するが、とりわけ奄美市の実家との疎遠な状態を発生せしめた背景には、彼女自身がカミサマという存在へと変質すること、そして、その導き役であるおばちゃん（後のオヤサマ）という存在に対して家族がみせる不安感が横たわっているものとみてよいだろう。頭のなかでは理解できても、それを本質として受容するか、表面的な受容にとどめるかの葛藤が、和香自身にも、また家族にも生じていたのである。

また、成巫後に和香自身が感じているように、こうした呪術的宗教職能者に対する目線に、肯定的なものもあれば否定的なものもあるのは、過去も現在も大きく変化していないものと考えられる。合理的思考や科学的思考とは対極にあるからである。しかし、彼女のような立ち位置を社会として受容できているのは、奄美という土地が有する文化的・宗教的背景を住民が共通理解しているためであろう。

既述したように、次稿においては本稿および前稿で示したデータや彼女が置かれた状況を鑑みつつ、現代社会におけるカミサマという存在について分析を試みる所存である。

【参考文献】

- ・八木橋伸浩、榮和香 1999「豊年祭と相撲―鹿児島県大島郡宇検村田検集落の事例から―」『論叢』（玉川学園女子短期大学紀要）23
- ・大森元吉、八木橋伸浩（共編・監修）2000『奄美・宇検村田検の生活誌』国際基督教大学教養学部社会科学科人類学研究室
- ・八木橋伸浩 2021「奄美におけるユタの成巫過程に関する覚書」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』14

（やぎはし のぶひろ）